

【土佐赤牛の価格低迷、移住者の農地確保、青年農業者の結婚について】

C： 私は梶ヶ森の中腹、標高800mぐらいのところの小さい牧場で、和牛、主に仔牛の生産ということで、黒い和牛や赤い和牛を飼っております。その堆肥を利用しまして、有機野菜の生産を約15年間続けておりまして、吉祥寺にある県のアンテナショップの「高知屋」にも出荷をしております。

それから、20数年前から農家カフェといいますか、小さい軽食レストランをやっております。最近では民宿の許可も取りまして、娘が農家民宿も始めました。

また最近の傾向で、田舎のほうが住みやすいと感じる人たちがかなり多く出てきているので、その人たちをどんどん受け入れております。こういうことが、これから田舎の重要な政策課題になるんじゃないかと思っています。

課題としては、今、3つ挙げております。一つは、土佐赤牛の価格の低迷がずっと以前から続いておりまして、全国の和牛市場、仔牛市場の価格の大体半値ぐらいで土佐赤牛の仔牛が取り引きされているという現状です。現状の価格で推移していくと、農家がもたなくなり、土佐赤牛は幻の牛になってしまう可能性もあります。

二つめに、移住者の農地の確保についてです。空き家に関しては、交渉をすればある程度理解してもらって確保はできるんですが、農地に関しては、都会に出て自分の農地がそこにあることを知る人がいなくなったり、所有権への意識が強くてなかなか地域のために生かしてもらえないという壁にも当たっています。思うように農地の確保ができない状況なので、市町村の条例などを取り混ぜながら、農業をしたいと言う人に農地を貸してあげる方法がないかなと考えています。

農業委員会や農業会議、それから県の農業公社もかなり取り組んでいると思いますが、もっと効果が上がるように、うまく農地を売ったり貸したりすることがスムーズにできないのかなと感じております。

三つめは、青年農業者の結婚についてです。やはり次の世代へ地域をつないでいくには、子供がそこにどれだけ生まれて育っていくかということになります。この地域で人生を送ろうという人たちが、家庭を築いて幸せな家庭生活を送ってほしいという願いがあって、県の移住コンシェルジュの人とも協力しながらいろいろなことに取り組んでいますが、なかなか成果が上がっていません。なかなか難しいので、男性のほうに女性との付き合い方をうまく洗脳していくようなことが非常に大事ななとつくづく感じております。

知事： まず赤牛の低価格の話ですが、私も食べてみて本当においしいと思いますし、成分分析でもヘルシーで素晴らしい牛ですが、今、約3千頭いるかいけないかということで、もっと数を増やしていけるのか、それとも本当に衰退してしまうか、際どいところにきていると思います。

(大産地の)九州の市場の問題とかもあってうまく国のスキームに乗らないという問題

もあろうかと思いますが、やっぱり何とんでも赤牛を多くの人に食べてもらうことで生産が拡大して、さらに食べてもらって、ということ積み上げていくことが必要だと考えているところなんです。

産業振興計画を始めてから、県の畜産振興課も、相当赤牛の売り込みに力を入れておりまして、新たな取り引き店がこの2年間で39店舗、うち県外が24店と増えてきているようです。例えば名古屋では、結構大きい量販店さんなど、大手も引き受けてくれるようになってきたという話です。

だから他の価格が落ちている中で、赤牛だけは少しずつですが上がってきている状況だと思います。しかし、全国、特に九州地方のことを考えるとまだ半値しか付いていないということですから、引き続き厳しい状況です。どうやって打開していくのかですが、やっぱり何と言っても一生懸命売り先を探して拡大生産していくという、その積み重ねを進めていく必要があると思います。

評判が悪ければ希望もなくなります。評判がいいので、肥育とか繁殖の仕組みをもう一段どんどん大きく進めていき、売れた分量を拡大していけないかということも考えています。地域で共同で整備する繁殖・肥育センターについて、県もいろいろ汗をかいていきますので、もう一段強化できるような取り組みが地域で一緒にできないものかと思っています。

C： 価格の設定の仕方が、今の1からA5という霜降りを中心とした価格設定じゃない設定で売っていくという努力をみんながしなきゃいけない。それができるかできないかが、赤牛が生き残っていけるかどうかにつながっていくと思います。

知事： さっき申し上げた名古屋などは、霜降りじゃないところに価値を見出している、それ自体はいいことですけどね。ただ、価格の体系がそうになってないというわけですよ。

だから、そうじゃない体系の肉のシェアを増やしていく取り組みを進めて、こっちで強くなっていくしかないかもしれません。

C： 赤牛を飼っている繁殖農家は、今の現状ではお金になってないと思うんです。嶺北は特に繁殖の農家がほとんどなので、経営的にもたないんじゃないかと心配をしています。

知事： 畜産分野では、まず「はちきん地鶏」で高知の肉を取り引きしてもらう店を切り開いて行って、そこに今度は「赤牛」を売り込んでいくという作戦で、1店舗、1店舗取り扱い店舗を拡大して行って、46店舗ぐらいになったそうです。

いい種牛の仔牛もこれからどんどん出ている状況です。しかし、どうしても赤牛というのが成り立たないということになるんだったら、高知県の畜産スタイルが根絶やしになっ

てくる可能性もあるので、いろいろな形でバックアップしていくような仕組みづくりを考えなければいけないと思います。市場での評判はいいので、是非産業として育成していただけるように、続けていけるように努力したいと考えています。

そして、移住者の農地の確保の話ですが、地元でやっている農業委員会での取り組みに加えて、農業公社の取り組みがあります。移住してこようと思う方々に、まず、市町村それぞれの中で遊休農地をマッチングするということを進めていただきたいと思います。また、市町村の枠を越えて県内で紹介や融通をし合うことも想定して、農業公社で情報を集め、移住者の皆さんに提供する取り組みを進めようとしているところです。

現在、農業公社で288件の農地情報と11軒の空きハウスの情報を持っていて、これまで2年間の取り組みで農地では48件、ハウスでは8軒マッチングをしています。

取り組みは始まったばかりですが、最初は農業公社でなかなか情報が集まらず、すごく苦戦をしました。所有権が守られるんだろうかという心配が出てきたりで、その心配を少しでも払拭して信頼していただけるように、県の公社で情報を集めるような仕組みにして2年目に至っていますが、だんだんマッチングの件数も増えてきているので、是非引き続き進めていきたいと考えているところです。

たくさん物件を持っていれば持っているほど紹介はしやすくなってくるので、是非もっと有名にしていきたいと思います。と思っています。

さらに、農地はあっても住む家が見つからないと移住へなかなかつながっていかないという場合もあると思いますが、それについては、宅建業協会さんと不動産業協会さんそれぞれとの間で、移住者に対して不動産情報を提供していただく仕組みを作ったところです。その協定を3月末に結ばせていただきました。この夏には、高知県内の空き不動産情報を、皆さんにオープンな形でお示しができるようになる予定です。移住を促進するための強力な武器だと思っていますので、是非お使いいただければなと思っています。

最後、結婚の話になりますが、県が「出会いのきっかけ応援事業」というのをやっているんですね。これは、「対話と実行」座談会で田野町へ行ったときに田野町のやり方をご紹介いただいて、それをヒントにしました。田野町主催の合コンには町内の若者は恥ずかしがることもあって参加されないそうですが、他の町からの参加があるということで、高知市で行えば、県内全域から集まってくれるかなと始めました。開催回数を増やして、少しでも多くの人に出会っていただこうとしているところです。周りの大人ができることはきっかけを作ることぐらいだと思うので、できるだけその面で力になればと思います。